

源氏物語論 その(一) 対偶律 (承前第
三回)

目加田 さくを

(Ⅱ) 文章上の対偶 付 和歌における対偶

漢文芸において創始され、華麗な完成を遂げた「対偶」、即ち、対偶という美の原則を学んだ紫式部は、作文の機が乏しいままに、和文の上にこれを試みたのである。先づ、全く簡単な中国流対偶直うつしの対偶文から、漸次、和文に融和した対偶文へと進展したようである。

(一)

たとえば、前掲、文鏡秘府論が元兢詩髓脳より引用している

元氏云易曰、水流_レ湿、火就_レ燥、雲從_レ竜、風從_レ虎、書曰、満招_レ損、謙受_レ益、此皆聖作切对之例也

流の簡単な対偶は、源氏物語の髓所にみられるところである。

関伽奉り 花折り

池に泳ぐ魚 山に鳴く鹿

過ぐしたるも まだ片生なるも

見しは亡く あるは悲しき

見るにも あかず 聞くにもあまる

人の御程 我が身の程

思ふには頼もしく 見るには煩はし

人々起きてこわづくり 馬どもの嘶るにも

木草の花につけても 水の流れにそへても

さて、和文の性質上——国語の文章では韻を中国のそれにおける程重視しない——、中国文芸論上の対偶の諸原則が、そのまま適用される事はむづかしい。従つて、対偶の類別となると、中国文芸論上たてられた前掲対偶の多種多様の類別の中、そのいくつかが移入され、試みられたにすぎないのであるが、対偶という美の理念は、みられるように、源氏物語の文章の中にも深く根づいてしまつたのである。

とにかく、前掲類別に従つて例を掲げてみると、(1)的名対(2)同対(3)異類対(4)意対、(5)隔句対(6)互成対、等々、及びその(7)混合対とでも称すべきものがみうけられるようである。因にこの分類は基準がことなるので相互に重なる場合が多い。即ち(1)(2)(3)はまた(4)(5)(6)でもある。という風にある。

(1) 的名対 (正対、正名対)

(東園青梅発 西園緑草開……)

春風桃李花開夜 秋雨梧桐葉落時

○ 春の花の林 秋の野の盛りをなむ昔よりとりくに人争ひ侍りける……

唐には春の花の錦に如くものなしと言ひ侍るめり

大和言の葉には秋の哀れを取りたてゝ思へる……花鳥の色をも音をも……

春の花の木をも植ゑ渡し 秋の草をも掘り移して

(薄雲)

○ つれくくなる夕暮もしは物哀れなる曙 (明石)

○ おきて広きうつものはにはさいはひもそれに従ひ せは

き心ある人はさるへきにて高き身となりてもゆたかなるへき方はおくれ

急なる人は久しく常ならず

心ぬるくなだらかなる人は長きためし (若菜)

○ 思し乱れてつれくとなかめ給ふ所は春の夜もいと明しかたきを

心やり給へる旅ねの宿りは 酔ひのまぎれにいとあけぬる心地して

○ 公事のしげきにや 私の志の深からぬにや

○ 昼は日一日寝をのみ寝暮し夜はすくよかに起きるて……

○ 昨日まで高き親の家に崇められ傳かれし人の女のかれて 今日直々しく下れる際の好色者ともに名をたち欺

亡き親の 面を伏せ 影を恥しむる 類…… (若菜)

○歎き明かし給へる曙
a a' b b' c c'

眺め暮し給へる夕暮

○思ひの外に悲しき道に出立ち給ひしかど遂には行き廻り
来なむと且は思し慰めき
この度は嬉しき方の御出立の又やは顧るべきと思すに哀
れなり

(2) 同対

△△△△△△△△△△
大谷広陵薄雲輕霧

○峯高く深き巖

居丈の高うを背長に

あだなる方に進み移り易なる人は……

頼もしげなく軽々しき事もありぬべき……

○艶なる歌もよまず気色ある消息もせで
△△△△△△△△△△

○怨ずべき事をば 見知らぬ様に仄めかし
恨むべからむ節をも 憎からずかすめなざば
A B C D A B C D

○折らば落ちぬべき萩の露
拾はば消えなむと見ゆる玉篠の上の露
A B C D A B C D

○さるべき節会など

五月の節に急ぎまるる朝何のあやめも思ひ鎮められぬ
にえならぬ根を引きかけ
A B C D E

九日の宴に先づ難き詩の心を思ひ廻らし暇なき折に菊
の露をかこち寄せ
A B C D E

など様のつきなき笑みにあはせさならでもおのづから後
におせへば
をかくも あんべかりける事の
哀れにも
などを……

その折につきなく
目にもとまらぬ

つれづれの紛らはしにも

○世の憂き 慰めにも

○この頃明暮御覧する長恨歌の御絵

亭子院の画かせ給ひて——絵
伊勢貫之によませ給へる——
男性歌人 女性歌人 歌と書

大和言葉をも 唐土の詩をも
唯その筋をぞ枕言にせさせ給ふ

絵に画ける楊貴妃の容貌は……

楊 太液の芙蓉
未央の柳

もげに通ひたりし容貌を唐めいたる粧
はうるはしうこそありけめ

桐 懐しうらうたげなりし……花鳥の色にも音にもよそ
ふべき方ぞなき

(3) 異対

天清白雲外

山峻紫微中

鳥飛髓去影

花落逐揺風

○世の誇り 人の怨み

○見るにも飽かず 聞くにも余ることを

○池に泳ぐ魚 山に鳴く鹿

○闍伽奉り 花折り

○鬼や食ひつらむ 狐めくものやとりもていぬらむ

(4) 意対

歲暮望空房

涼風起坐偶

寢興日已寒

白露生庭

燕

○山藍に摺れる竹の節は松の緑に見え紛ひ挿頭の花の色は

(説明27号54頁)

秋の草に異なる差別分れて

(5) 隔句対

昨夜越溪難 含悲赴上蘭
今朝逾嶺易 抱笑入長安

○五月の節に急ぎ参る朝何のあやめも思ひ鎮められぬにえ
ならぬ根をひきかけ
九日の宴に先づ難き詩の心を思ひ廻らし暇なき折に菊の
露をかこちよせ

○昨日まで高き親の家に崇められ傳かれし人の女の
今日は直々しく下れる際の好色者ともに名をたち欺かれ
て

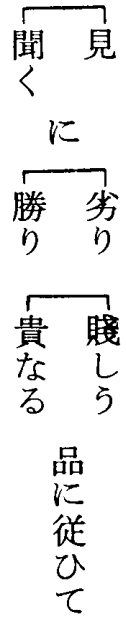
(6) 互成体及びその複合対

天地心間静 日月眼中明
麟鳳千年貴 金銀一代榮

世の人の有様を見聞くに劣り勝り賤しう貴なる品に従ひ
て容貌も心あるべきものなりけり

右を图示すれば

世の人の有様を



容貌も
心も
あるべきものなりけり

a a' b b' c c'
劣り勝り賤しう貴なる品に従ひて容貌も心もあるべきものなりけり

○空の月星を動かし時ならぬ

霜宵を降らせ雲雷を騒がし

天地を動かし 鬼神の心を和らげ

A A' a a'
花鳥の色をも音をも

花と色、鳥と音とは縁がある、という複合対。つまり、

花の色、鳥の音という対でもあるわけである。

⑦ 混合対

意対 賦体対 互成対

行き交ふ時々意対に随ひ花鳥の色をも音をも同じ心互成対に

起き臥し見つゝはかなき事ををも本末をとりて言ひ交は意対

し心細き世の憂さも辛さも打語らひあはせ聞えしにこそ同対

慰む方もありしかをかをしき事哀れなる節をも聞き知る人異対

も無き儘によろづかき暮し心一つを碎きて宮のおはまし同対(意味上の対:大君の死が) 異対

さずなりにし悲しさよりもやゝ打勝りて恋しく佗しきに互成対

如何にせむと明け暮るゝも知らず……

的名対

善きも悪しきも世に経る人の有様の見るにも飽かず聞く異対

にも余る……善き様に言ふとては善き事の限りを選び出意対 x

で人に随はむとては又悪しき様の珍らしき事を取り集め○

たる…他の朝廷のさへ作りやは変れる同じ日本の国の事互成対

なれど昔今のに変わるなるべし深き浅き事の差別こそあら互成対

的名対

互成対

め……煩惱と菩提との隔りなむこの人の善き悪きばかり

A 的名対

B 的名対

「我が身に憂へある時 すべて世怨めしう思ひ知る初

めありてなむ

C 同対

道心も起る業なめるを」年若く「世の

中思ふに叶ひ

B'

何事も飽かぬ事はあらじと覚ゆる身の程

に

C'

さはた後の世をさへ辿り知り給ふらむ」か有難き

(橋)

(二)

更には、字句は明確な対偶をなさないが、文章が意味上の対偶をするものである

的名対

「余所にて隔たる月日は覚束なさも理に然りと
もなど慰め給ふ」を

「近き程にのゝじりおはして強顔く過ぎ給ふな
む」辛くも口惜しくも思ひ乱れ給ふ」

同対

目蓮が仏に近き身にて忽ちに救ひけむためしに
も……(目蓮が地獄に堕ちた亡母を救つた故事)

え継がせ給はざらむものから玉の簪捨てさせ給

はむも(秋好中宮が苦患に堕ちている故六條御

息所を救うため出家を希望している事)

よべ

○昨夜は打忍びてか易かりし御歩行

今朝は頭はれ給ひて上達郎なども知り給へる限りは皆御

送り仕う奉り給ふ(鈴虫冷泉院)

○大方の人目には昔を忘れぬ用意見せつゝいと懇に訪らひ

聞え給ふ

下の心には斯くては止むまじくなむ月日に添へて思ひ勝

り給ひける

○大方のあるべかしき事どもは
中納言殿
阿闍梨
なむ

仕うまつり給ふ

ここには法服の事
細かなる御扱ひを……

○自らの御上はかくそこはかたなくもてけちて恥しげなる

にすがくともえ宣ひよらで宮の御事をぞまめやかにき

こえ給ふ

○秋の夜の隈なき月には万の物の滞りなき琴笛の音も明ら

かにすめる心地し侍れどなほ殊更に作り合はせたるやう

なる空の気色花の露もいろく目移ろい心散りて限りこ

そ侍れ

春の雲のたどくしき霞のまより朧なる月影に静かに吹

き合はせたるやうにはいかでか笛の音なども艶に澄みの

ぼり果てずなむ女は春を愉しむと古き人の言ひおき侍りけるげにさなむ侍りける懐かしく物の整ほるは春の夕暮にこそ侍りけれ

(大徳文)

○手はいとあしうて歌はわざとがましくて引放ちてぞかきたる……

大事と思ひまはして詠み出だしつらむと思せば歌の心ばへもいと哀れにて

(匂宮文)

等閑にさしも思されぬなめりと見ゆる言の葉をめでたく好ましげにかきつくし給へる人の御文
よりはこよなく目とまりて涙もこぼるれば

(三)

一文中個人心理の対偶を形成する特殊なる用語
後掲桐壺巻中に用例を求めると

- a. なかく (18頁) 用例 かへりては (19頁)
- b. かつは (15頁)
- c. ……かへす (21頁)
- d. 然りとも
- e. 然はいへど
- f. 流石に

等の諸語は、それらが位置する文章にあつて、当然、前半もしくは前文章に現われる事柄の内容がそれらの語の後につづく文章に現れる事柄と対偶をなすのである。

- a. 前文よりかえつて後文が中事柄が
- b. 一方で：他方で…

c. 前文の事柄の進行方向を後文の事柄は逆に引きもどす

d. 前文事情に対し異つた事柄、事情

- e. dに同様
- f. dに同様

a. この人の御様の斜に打紛れたる程ならば斯く見馴れぬる年頃のしるしに打緩ぶ心もありぬべきを

恥かしげに見えにくき気色もなかくいみじう慎ましきに我が世はかくて過し果ててむ

- A' さほど (美しい間柄故) B
- 美貌でなかつたら…結婚する気になつたらう
- なかく (かえつて)
- A' 美貌だから…結婚する気にならぬ B'

(薰の欲求) A

(大君)

e 強ひて破らむをば辛くいみじからむと思したれば思さるゝ様こそあらめ軽々しく他様に靡き給ふことはた世にあらじと心長閑なる人は然はいへど

A 欲求の否定

いとよく思ひ鎮め給ふ

「障子の固め」を強いて破つて結婚したい欲求がありながら、薰の人柄からその欲求をおしころしてこ
となくすまず、「然はいへど」が、前文、後文の対
偶 (的名対多くの場合) を示す。

f 常よりも我面影に恥づる頃なれば疎ましと見給ひてむも流石に心苦しきはいかなるにか
薰を拒否しながら「さすがに」

容貌の衰を薰に見られる事を気にするのはいかなるにか、と大君のひめたる心の矛盾をつく。「さすがに」が相反する心の働きを支えるかなめである。

(四)

さて、次に、桐壺巻を掲げて、その実体をみてみよう。文章に語彙、行動、心理、性格等々の対偶の様相がそれと異つた対偶文章を形成するのであるが、対偶を有する文章の種々相を知り、又全く対偶を有しない文章の比率の実際を知る為である。数字は、文章の提示され

る先後の順位を示す。

対偶ある文章 () 印は潜在対偶、(文章の表面には出ないが対偶するものの潜在は確実なる場合)

1 2 3 4 5 6 7 8 10 12 13 18 19

的名対

14 弘徽殿 a b c d
15 桐壺更衣 b' 1 i e f h g' 以下同

的名対

17 帝が桐壺 ()
18 ()
19 桐壺が清涼殿 () ()

意的名対

20 桐壺更衣後涼殿 ()
21 後涼殿他 () ()

意的名対
的名対

43 44 45
22 23 (24) 26 28 30 31 32 33 35 37 38 40

的名対

46 帝のさまあしき御もてなし故…嫉み
47 桐壺更衣の人柄…恋ひしのぶ
48 50 (51) 52 54 55 57 (59) 60 61

「

61 祖母 (ぐちの相手) 参内せよ
62 子 (気がり) …参内せよ

64 65 66 67 68 69

的名

69 祖母参内を拒否
70 若宮参内をおぼしいそぐ

71

的 名	的 名	意 対	的 名	同意 対対	同 対	同意 対対	的 名
109 108	107 108	106 105 104 実人物 画	103 101 100 (故楊貴妃の霊) 太真の釵——玄宗がみる 故桐壺更衣の御髪上げの調度——を帝がみる	99 98 94 96 97 98	92 91 命婦の復命 帝の下問	81 82 (84) 85 86 87 89 90 79 77 80	73 72 若宮と対面希望 若宮就寝

同 対	的 名	同 対	同 対	的 名
168 167	159 (160) 161 162 (163) 164 165 166 169 170 171 172 173 175 177	158 157 155 149 156 150	145 143 142 146 朝廷↓相人贈物 147 相人↓皇子捧物 148 149 (150) 152 153 154	141 140 139 142 119 117 118 120 121 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 139 140

同対 179 178

180
181
182
183
184
185
188
191
192
193
194
199
200
201
204
(208)
209
210
211
212

賦体対

190 189

同対

194 春宮元服
195 若宮元服
若宮元服

同意対

202 藏人少将と右大臣四の君
203 源氏 と左大臣葵上

的名対

205 藤壺
207 葵上

同対

213 宮中 淑景舎……母御息所の女房達
214 里邸祖母・母の邸 修理

215
216
217
対偶なき文章

三の例

118 9
122 11
138 16
144 25
151 27
174 29
176 34
186 36
187 39
196 41
197 42
198 49
56
58
76
78
83
80
93

かりに、桐壺卷を二百十七のセンテンスにくぎつて考えてその中三十一が全く対偶を有しない文章であり、百八十六が、語彙が対偶をなすか、語彙を含む文章が対偶をなすか、明確なる文字の対偶はないが、それに相当することば同志の対偶、意対、更には前の文章と後の文章とセテンス同志が対偶をなすか、である。即ち、いかに式部が対偶的意識乃至対偶律に依拠していたかどうかがわかるのである。因に、対偶の多い文章は、源氏五十四帖中、主人公の母の死、(桐壺) 主人公流謫、(須磨明石) 主人公恋愛談義(帚木) 主人公の永遠の恋人の死 (薄雲) 等々の巻、いわゆる「あはれ深き巻々」に多いようである。この事については詳細は後述にゆづる事としよう。次稿には、和歌における対偶について考える予定である。

桐壺

互成対 同対

いづれの御時にか女御更衣数多侍ひ給ひける中にいとやんごとなき際にはあらぬが勝れて時めき給ふありけり」。¹ 初

めより我はと思ひあがり給へる御方々めさましきものに

敵対 (桐壺を)

互成対
同対

しめ嫉み給ふ²。同じ程それより下臈の更衣達はまして安

互成

からず³。朝夕の宮仕につけても人の心を動かし恨みを負

同対

ふ積りにやありけむいとあつしくなりゆき物心細げに里が

的名対・意対

ちなるをいよいよ飽かず哀れるものに思ほして人の譏を

同対

もえ憚らせ給はず世の例にもなりぬべき御もてなしなり⁴

同対の互成対

上達部上人などもあいなく目を側めつゝいと眩き人の御お

5 同対A唐土(楊貴妃と玄宗)

ぼえなり」唐土にも斯かる事の起りにこそ世も乱れ悪しか

A'本朝(桐壺更衣と帝)

りけれとやうく天の下にもあじきなく人のもて悩み種に

A・A'

なりて楊貴妃の例も引き出でつべりなりゆくにいとほした

なき事多かれど忝き御心ばへの類なきを頼みにて交らひ給

6 Aa的名対

ふ」父の大納言は亡くなりて母北の方なむいにしへの人の

A'

由あるにて親打具しさしあたりて世のおぼえ花やかなる御

方々にも劣らず何事の儀式をもてなし給ひけれど取立てて

平常と

はかばかしき御後見しなれば事とある時はなほ抛り所な

7 意対・異対(前世・現世)

く心細げなり」前の世にも御契りや深かりけむ世になく清

8

らなる玉の男御子さへ生まれ給ひぬ」いつしかと心許なが

らせ給ひて急ぎ参らせて御覧するに珍らかなる児の御容貌

隔句対
的名対

a' (故大納言—更衣)

(b'よせなし)

なり」一の御子は右大臣の女御の御腹にて寄せ重く疑ひな

d

A'

b

e'

e

き儲の君と世にもてかしづき聞ゆれどこの御匂には並び給

b

A'

ふべくもあらざりければ大方のやんごとなき御思ひにて此

c'f' d'

10

の君をば私物に思ほしかしづき給ふ事限りなし」母君初め

11

よりおしなべての上宮仕し給ふべき際にはあらざりき」お

異対

ぼえいとやんごとなく上衆めかしけれど理無く纏はさせ給

同対

イロ○○

イ'ロ'ハ'○○

ふ余りにさるべき御遊びの折々何事にも故ある事のふし

12

くには先づ参う上らせ給ふ」或時には大殿籠り過してや

がて侍はせ給ひなど強ちに御前去らずもてなさせ給ひし程

意対

におのづから軽き方にも見えしをこの御子生まれ給ひて後

はいと心殊に思ほし掟てたれば坊にも善うせずは此の御子

の居給ふべきなめりと一の御子の女御は思し疑へり」人よ

り先に参り給ひてやんごとなき御思ひなべてならず御子達

一面
桐壺更衣に傾倒し
なほ
（桐壺更衣に傾倒し）
他面

などもおはしませばこの御方の御諫をのみぞなほ煩はしう

心苦しう思ひ聞えさせ給ひける」畏き御蔭をば頼み聞えな

がら貶しめ疵を求め給う人は多く我が身はか弱く物果敢な

x (愛される) が故の不幸

き有様にてなかくなる物思をぞし給ふ」御局は桐壺な

り」数多の御方々を過ぎさせ給ひつゝ隙なき御前渡りに人

A B
更衣清涼殿に上る
A
17
A
15
14 a' b'

の御心を尽くし給ふも実に理と見えたり」参り上り給ふに

互成体 互成体

も余りうち頼る折々は打橋渡殿此処彼処の道に怪しき業を

互成体

しつゝ御送り迎へ人の衣の裾堪へ難う正無き事どもあり」

18

又或時はえさらぬ馬道の戸を鎖し籠め此方彼方心を合はせ

弘徽

13

てはしたなめ煩はせ給ふ時も多かり」事に触れて数知らず
苦しき事のみ増れはいといたう思ひ佗びたるをいとど哀
れと御覽じて後涼殿にもとより侍ひ給ふ更衣の曹司を外に

移させ給ひて上局に賜はす」その恨みまして遣らむ方な

し」この御子三つになり給ふ年御袴着の事一宮の奉りしに

劣らず内蔵寮納殿の物を尽くしていみじうせさせ給ふ」

それにつけても世の譏のみ多かれどこの御子のおよづけ

もておはする御容貌心ばへ有り難く珍らしきまで見え給ふ

23
潜在的名対
(物の心知らざる人)

をえ嫉みあへ給はず」物の心知り給ふ人はかかる人も世に

出でおはするものなりけりと浅ましきまで目を驚かし給

ふ」その年の夏御息所果敢なき心地に煩ひて罷出なむと

し給ふを暇更に許させ給はず」年頃常のあつしきになり給

へれば御目馴れてなほ暫し試みよとのみ宣はするに日々に

互成体

重り給ひてたゞ五日六日の程にいと弱うなれば母君泣く

賦体対
奏して罷出させ奉り給ふ」かゝる折にもあるまじき恥

26

もこそと心遣ひして御子をば留め奉りて忍びてぞ出で給

ふ²⁷」限りあればさのみもえ留のさせ給はず²⁸」御覧じだに送

らぬ覺束なさをいふ方なく思さる²⁹」いと匂ひやかに美しげ

なる人のいたう面やせていと哀れと物を思ひしみながら言

に出でて聞えやらず有るか無きかに消え入りつゝもの

的名対

的名対

し給ふを御覧ずるに來し方行く末思召されず万づの事を

賦

泣くく契り宣はすれど御答へもえ聞え給はず³⁰」まみなど

賦 賦

互

もいとたゆげにていととなよくと我かの気色にて臥たれ

31

意対

ば如何様にかと思召し惑はる³¹」輦車の宣旨など宣はせても

32

また入らせ給ひては更にえ許させ給はず³²」限りあらむ道に

も後れ先だたじと契らせ給ひけるをさりともしうち捨てては

え行きやらじと宣はするを女もいとみじと見奉りて限り

とて別るゝ道の悲しきにかまはしきは命なりけり いと

かく思う給へましかばと息も絶えつゝ聞えまほしげなる事

は有りげなれどいと苦しげに弛気なれば斯くながらともか

くもならむを御覧じ果てむと思召すに今日始むべき祈禱ど

も然るべき人々承れる今宵よりと聞え急がせば理なく思ほ

33

しながら罷出させ給ひつゝ³³」御胸のみつと塞がりてつゆまど

反対

ろまれず明しかね給ふ³⁴」御使の行き交ふ程もなきに猶いぶ

反対

せさを限りなく宣はせつるを夜中打過ぐる程になむ絶え果

て給ひぬるとて泣き騒げば御使もいとあへなくて帰り参り

ぬ³⁵」聞召す御心惑ひ何事も思召し分かれず籠りおはします³⁶」

意対

(欲求と慣例矛盾)

御子はかくてもい御覧せまほしけれどかゝる程に侍ひ給ふ

37

(御子)

意対

例なき事なれば罷出給ひなむとす³⁷」何事かあらむとも思ほ

したらず侍ふ人々の泣き惑ひ上も御涙の隙なく流れおはし

38

ますを怪しと見奉り給へるをよろしき事にだにかゝ別れの

悲しからぬはなきわざなるをまして哀れに言ふ甲斐無し³⁸」

限りあれば例の作法に斂め奉るを母北の方同じ煙にも上り

なむと泣き焦れ給ひて御送りの女房の車に慕ひ乗り給ひて

愛宕といふ所にいと厳しうその作法したるにおはし著きた

反対

39

る心地いか許りかはありけむ³⁹」空しき御骸を見るく猶お

はするものと思ふがいと甲斐無ければ灰になり給はむを見
奉りて今は亡き人と一向に思ひなりなむと賢しう宣ひつれ
ど車より落ちぬべう惑ひ給へば然は思ひつかしと人々もて
煩ひ聞ゆ」内裏より御使あり」三位の位贈り給ふよし勅使
40 (更衣に)

来てその宣命読むなむ悲しき事なりける」女御とだにい
せずなりぬるが飽かず口惜しう思さるれば今一階の位をだ
42 「更衣……」

にと贈らせ給ふなりけり」これにつけても憎み給ふ人々多
43

44 「物思ひ知り給ふは様貌などのめでたかりし事心ばせ
のなだらかに目易く憎み難かりし事など今ぞ思し出づる」
45

様あしき御もてなし故こそすげなう嫉み給ひしか」人柄の
46 A' 47

哀れに情ありし御心を上の女房なども恋ひ忍びあへり」
48 「潜在(ある時は) 的名対
古歌と照応同対。
なくてぞとはかゝる折にやと見えたり」はかなく日頃過ぎ
49

て後のわざなどにも細かに訪らはせ給ふ」程経るまゝにせ
む方なう悲しう思さるゝに御方々の御宿直なども絶えてし
給はずたゞ涙にひぢて明し暮ささせ給へば見奉る人さへ露

50 (生前) 潜在的名対
けき秋なり」亡き跡まで人の胸開くまじかりける人の御覺
えかなとぞ弘徽殿などには猶恕し無う宣ひける」一の宮を
見奉らせ給ふにも若宮の御恋しさのみ思ほし出でつゝ親し
51 52
き女房御乳母などを遣はしつゝ有様を聞召す」野分だちて
俄に膚寒き夕暮の程常よりも思し出づる事多くて鞆負の命
婦といふを遣はす」夕月夜のをかしき程に出し立てさせ給
うてやがてながめおはします」斯様の折は御遊びなどせさ
53 54
せ給ひしに心殊なる物の音を搔鳴らしはかなく聞え出づる
(更衣は)

言の葉も人よりは異なりし気はひ容貌の面影につと添ひて
思さるゝにも闇の現には猶劣りけり」命婦彼処に罷出著き
55 56
て門引き入るゝより気はひ哀れなり」寡婦住みなれど人
人の御かしづきにとかく繕ひ立てて目易き程にて過し給ひ
つるを闇に昏れて伏沈み給へる程に草も高くなり野分にい
とゞ荒れたる心地して月影ばかりぞ八重葎にも障らずさし
57 58
入りたる」南面に下して母君頼にえ物も宣はず」今まで留
(往生し)

59
古歌と異対

た娘)潜在的名対

まり侍るがいと憂きをかゝる御使の蓬生の露分け入り給ふ

につけても恥しうなむとてげにえ堪ふまじく泣い給ふ」参

りてはいと心苦しう心肝も尽くるやうになむと典侍の奏

し給ひしを物思ひ給へ知らぬ心地にもげにこそいと忍び難

う侍りけれとてやゝためらひて仰言伝へ聞ゆ」暫時は夢か

とのみ辿られしをやうく思ひ鎮まるにしも覚むべき方な

く堪へ難きは如何にすべきわざにかとも問ひ合はすべき人

だになきを忍びては参り給ひなむや」若宮のいと覚束なく

露けき中に過し給ふも心苦しう思さるゝを疾く参り給へ」

などはかぐしうも宣はせやらず噎せかへらせ給ひつつ且

は人も心弱く見奉るらむと思し慎まぬにしもあらね御気色

の心苦しさに承りも果てぬやうにてなむ罷出侍りぬるとて

御文奉る」目も見え侍らぬにかく畏き仰せ言を光にてなむ

とて見給ふ」程経ば少し打紛るゝ事もやと待ちすぐす月日

に添へていと忍び難きは理なきわざになむ」幼稚き人も如

何にと思ひやりつゝ諸共にはぐくまぬ覚束なさを今は猶昔

の形見に准へてもなし給へ」など細やかに書かせ給へり」

(萩の名所)意対(異対)

宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ」

とあれど見え給ひはず」命長さのいと辛う思う給へ知ら

るゝに松の思はむ事だに恥かしう思う給へ侍れば百敷に行

き交ひ侍らむ事はましていと憚多くなむ」畏き仰言を度々

承りながら自らはえなむ思ひ給へ立つまじき」若宮は如何

思ほし知るにか参り給はむ事をのみなむ思し急ぐめれば理

に悲しう見奉り侍るなど内々に思ひ給ふる様を奏し給へ」

ゆゝしき身に侍ればかくておはしますも忌々しう忝くなど

宣ふ」宮は大殿籠りにけり」見奉りて委しく御有様も奏し侍

らまほしきを待ちおはしますらむを夜更けりぬべしとて急

ぐ」昏れ惑ふ心の闇も堪へ難き片端をたにはるくばかりに

聞えまほしう侍るを私にも心のどかに罷出給へ」年頃嬉し

く面立たしき序にのみ立寄り給ひしものをかゝる御消息に

帝 祖母

古歌と同対

意対(的名)

意対(的名)

若宮

意対(的名)

意対

意対

〔はかなく死ぬ事〕

75

て見奉るかへすく強顔き命にも侍るかな」生まれし時よ
り思ふ心ありし人にて故大納言今はとなるまで唯この人の
宮仕の本意必ず遂げさせ奉れ」我亡くなりぬとて口惜しう

思ひくづほるなとかへすく諫め置かれ侍りしかばはかば

かしう後見思ふ人なき交らひはなかくなるべき事と思ひ

給へながら唯かの遺言を違へじとばかりに出し立て侍りし

を身に余るまでの御志の万づに忝きに人げなき恥を隠しつ

ゝ交らひふめりつるを人の嫉み深く積り安からぬ事多くな

り添ひ侍るに横ざまなるやうにて終にかくなり侍りぬれば

(感謝
しつづ)

◎

77

却りてはつらくなむ畏き御志を思ひ給へられ侍る」これも

理なき心の闇になむと言ひもやらずむせ返り給ふ程に夜も

78

79

更けぬ」上も然なむ」我が御心ながら強ちに人目驚くばかり

◎

思されしも長かるましきなりけりと今はつらかりける人の

80

契りになむ」世に聊かも人の心を曲げたる事はあらじと思

ふを唯この人故にて数多さるまじき人の恨を負ひし果て果

ては斯う打捨てられて心をさめむ方なきにいとゞ人わろく

頑なに成り果つるも前の世ゆかしうなむと打返しつづ御潮

81

垂れがちにのみおはしますと語りて尽きせず」泣くく夜

82

いたう更けぬれば今宵過ぎず御返り奏せむと急ぎ参る」月

は入方の空清う澄み渡れるに風いと涼しく吹きて叢の虫の

(三の例)

83

(人間
私)

声々催し顔なるもいと立ち離れにくき草のもとなり」鈴虫

潜在同対

の声の限りを盡くしても長き夜飽かずふる涙かな」えも乗

84

りやらず」いとゞしく虫の音しげき浅茅生に露置き添ふる

85

雲の上人託言も聞えつべくなむと言はせ給ふ」をかしき御

贈物などあるべき折にもあらねば唯かの御形見にとてかゝ

る用もやと残し置き給へりける御装束一領御髪上の調度

86

めく物添へ給ふ」若き人々悲しき事は更にもいはず内裏辺

を朝夕に慣らひていとさうくしく上の御有様など思ひ出

若

で聞ゆれば疾く参り給はむ事をそゝのかし聞ゆれどかくい

宮に対するとともに若き人々に対する

ましくしき身の添ひ奉らむもいと人聞き憂かるべし又見奉

らで暫しもあらむはいと後めたる思ひ聞え給ひてすがすが

87

ともえ参らせ奉り給はぬなりけり」命婦はまだ大殿籠らせ

88

給はざりけるを哀れに見奉る」御前の壺前裁のいと面白き

實は命婦をまつ
 盛りなるを御覽ずるやうにて忍びやかに心にくき限りの女
 房四五人侍はせ給ひて御物語せさせ給ふなりけり⁸⁹この頃
 明暮御覽ずる長恨歌の御絵亭子院の画かせ給ひて伊勢貫之
 に詠ませ給へる大和言葉をも唐土の詩をも唯その筋をぞ枕
 言にせさせ給ふ⁹⁰いと細やかに有様を問はせ給ふ⁹¹哀れな
 りつる事忍びやかに奏す⁹²御返り御覽ずればいと畏きは
 置所も侍らず⁹³斯かる仰言につけてもかき昏す乱り心地に
 なむ⁹⁴荒き風防ぎし蔭の枯れしより小萩が上ぞ静なきなど
 やうに乱りがはしきを心をさめざりける程と御覽じ免すべ
 し⁹⁵いと斯うくも見えじと思し鎮むれど更にえ忍びあへさ
 せ給はず⁹⁶御覽じ始めし年月の事さへかき集め万づに思し
 続けられて時の間も覚束無かりしをかくても月日は経にけ
 りと浅ましう思召さる⁹⁷故大納言の遺言過たず宮仕の本意
 深くものしたりし喜びは甲斐ある様にとこそ思ひ渡りつれ
 言ふ甲斐なしやと打宣はせていと哀れに思しやる⁹⁸かくて

期待
 反結果
 反対

もおのづから若宮など生ひ出で給はゞさるべき序もありな
 む⁹⁹命長くとこそ思ひ念ぜめなど宣はす¹⁰⁰かの贈物御覽ぜ
 さす¹⁰¹亡き人の住処尋ね出でたりけむ徴の釵ならましかば
 と思ほすもいと甲斐なし¹⁰²尋ねゆく幻土もがな伝にても魂
 の在所を其処と知るべく¹⁰³絵にかける楊貴妃の容貌はいみ
 じき画師といへども筆限りありければいと匂ひなし¹⁰⁴太液
 の芙蓉夫央の柳もげに通ひたりし容貌を唐めいたる粧はう
 るはしうこそありけめ¹⁰⁵懐しうらうたげなりしを思し出づ
 るに花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき¹⁰⁶朝夕の言種
 に羽を比べ枝を交さむと契らせ給ひしに叶はざりける命の
 程ぞ尽きせず恨めしき¹⁰⁷帝風^帝の音虫の音につけても物のみ悲
 しう思さるゝに弘徽殿には久しう上の御局にも参り上り給
 はず月の面白きに夜更くるまで遊びをぞし給ふなる¹⁰⁸いと

同対

すさまじうものしと聞召す」この頃の御気色を見奉る上人

女房などは傍痛しと聞きけり」いと押立ちかどくしき所

ものし給ふ御方にて事にもあらず思し消ちてもてなし給ふ

111 (帝の悲愁)
潜在意対 112

なるべし」月も入らぬ」雲の上も涙に昏る、秋の月いかで

113

すむらむ浅茅生の宿」思しやりつゝ燈火を挑げ尽くして起

27号41頁長恨歌と同対

きおはします」右近の司の宿居奏の声聞ゆるは丑になりぬ

115

るなるべし」人目を思して夜の御殿に入らせ給ひてもまど

116

ろませ給ふ事難し」朝に起きさせ給ふとても明るくもしら

伊勢歌同対

27号41頁長恨歌同対

でと思し出づるにもなほ朝政は怠らせ給ひぬべかめり」物

117

なども聞召さず朝餉の気色ばかり触れさせ給ひて大床子の

御膳などはいと遙かに思し召したれば陪膳に侍る限りは心

118

苦しき御気色を見奉り歎く」すべて近う侍ふ限りは男女い

119

と理なきわざかなと言ひ合はせつゝ歎く」さるべき契りこ

そはおはしけめそこらの人の譏り恨みをも憚らせ給はずこ

の御事に触れたる事をば道理をも失はせ給ひ今はたかく世

の中の事をも思し捨てたるやうになり行くはいと怠々しき

わざなりと他の朝廷の例まで引き出でつゝ私語き歎きけ

り」月日経て若宮参り給ひぬ」いとこの世の物ならず清

121

(超人間界)他の世界

122

らにおよづけ給へればいとゆゝしう思したり」明るる年

の春坊定まり給ふにもいと引越さまほしう思せど御後見す

べき人もなく又世の承け引くまじき事なればなか／＼危く

思し憚りて色にも出させ給はずなりぬるをさばかり思した

123

れど限りこそありけれと世の人も聞え女御も御心落ち居給

ひぬ」かの御祖母北の方慰む方なく思し沈みておはすらむ

所にだに尋ね行かむと願ひ給ひし験にや終に亡せ給ひぬれ

124

意体(同対)(更衣の社)
ばまたこれを悲しみ思すこと限りなし」御子六つになり給

(前度)
潜在的名

125

ふ年なればこの度は思し知りて恋ひ泣き給ふ」年頃馴れ睦

び聞え給へるを見奉り置く悲しびをなむ返す／＼宣ひけ

126

(里)(潜在異対)

127

」今は内裏にのみ侍ひ給ふ」七つになり給へば書始など

せさせ給ひて世に知らず聡う賢くおはすれば余りに怖ろし

128 (昔)

きまで御覽ず「今は誰もくえ憎み給はじ」母君なくてだ

衣生前らうたくせず

にらうたうし給へとて弘徽殿などにも渡らせ給ふ御供には

130

やがて御簾の内に入れ奉り給ふ「いみじき武士讐敵なりと

も見ては先づ打笑まれぬべき様のし給へればえ差し放ち給

131

はず」女御子達二所この御腹におはしませど准ひ給ふべき

132

だにぞなかりける」御方々も隠れ給はず」今より艶かしう

恥かしげにおはすればいとをかしう打解けぬ遊種に誰も誰

134

も思ひ聞え給へり」わざとの御学問はさるものにて琴笛の

是にも雲居を響かしすべて言ひ続けばうたてぞなりぬべき

135

人の御様なりける」その頃高麗人の参れるが中に賢き相人

的名対

ありけるを聞召して宮の中に召さむ事は宇多帝の御誠あれ

136

ばいみじう忍びてこの御子を鴻臚館に遣はしたり」御後見

だちて仕う参る右大弁の子のやうに思はせてゐて奉る」相

138

人驚きて数多度傾き怪しむ」国の親となりて帝王の上なき

位に登るべき相おはします人の其方にて見れば乱れ憂ふる

139

事やあらむ」朝廷の固めとなりて天の下を輔くる方にて見

れば又その相違ふべしといふ」辨もいと才賢き博士にて言

140

潜在同対(相人の才)

ひ交したる事どもなむいと興ありける」文など作り交して

今日明日帰り去りなむとするにかく有り難き人に対面した

る喜び却りては悲しかるべき心ばへを面白く作りたるに

御子もいと哀れなる句を作り給へるを限りなう愛で奉りて

142

いみじき贈物どもを捧げ奉る」朝廷よりも多く物賜はず」

おのづから事広ごりて漏らさせ給はねど春宮の祖父大臣な

144

ど如何なる事にかと思し疑ひてなむありける」帝畏き御心

に倭相をおほせて思し寄りにける筋なれば今までの君を

親王にもなさせ給はざりけるを相人は真に賢かりけりと思

4

し合はせて無品親王の外戚の寄せ無きには漂はさじ我が御

A

世もいと定めなさを直人にて朝廷の御後見をするなむ行先^{A'}

も頼もしげなる事と思し定めていよく道々の才を習はせ

給ふ¹⁴⁵「際殊に賢くて直人には可惜^{めたらし}しけれど親王となり給ひ

なば世の疑ひ負ひ給ひぬべく物し給へば宿曜の賢き道の人に考へさせ給ふにも同じさまに申せば源氏になし奉るべく

思しおきてたり¹⁴⁶。年月に添へて御息所の御事を思し忘るゝ

折なし¹⁴⁷「慰むやと然るべき人々を参らせ給へど准ひに思

さるゝだにいと難き世かなと疎ましうのみ万づ思しなりぬるに先帝の四の宮の御容貌優れ給へる聞え高くおはしま

す¹⁴⁸「母后世になくかしづき聞え給ふを上侍ふ典侍は先帝

の御時の人にてかの宮にも親しう参り馴れたりければ幼稚くおはしましし時より見奉り今も仄見奉りて亡せ給ひにし

御息所の容貌に似給へる人を三代の宮任に伝はりぬるにえ見奉りつけぬに後の宮の姫宮こそいとよう覚えて生ひ出で

させ給へりけれ¹⁴⁹「有り難き容貌人になむと奏しけるに真に^{潜在}

やと御心留まりて懇に聞えさせ給ひけり¹⁵⁰「母后あな怖ろし^{同対}

や¹⁵¹「春宮の女御のいとさがなくて桐壺の更衣の露に果敢な

くもてなされし例もゆゝしうと思し慎みてすがくしうも^{推定同対}

思し立たざりける程に后も失せ給ひぬ¹⁵²「心細き様にておは

しますに「唯わが御子達と同じ列に思ひ聞えむ」といと懇^{意対同対}

に聞えさせ給ふ¹⁵³「侍ふ人々御後見達御兄の兵部卿親王など

かく心細くておはしまさましよりは内裏住せさせ給ひて御¹⁵⁴

心も慰むべくなど思しなりて参らせ給へり¹⁵⁵「藤壺と聞ゆ¹⁵⁶

げに御容貌有様怪しきまでぞ覚え給へる¹⁵⁶「これは人の御際

勝りて思ひなしめでたく人もえ眨しめ聞え給はねばうけば¹⁵⁷

りて飽かぬ事なし¹⁵⁸「かれは人も許し聞えざりに御志の生

憎なりしぞかし¹⁵⁹「思し紛るゝとはなけれどおのづから御心

移ろひてこよなく思し慰むやうなるも哀れなるわざなりけ¹⁶⁰

り¹⁶⁰「源氏の君は御辺去り給はぬをまして繁く渡らせ給ふ御^{潜在(後宮と対面)}

方^{意対(的名)}

いたるやはある」とりぐにいとめでたけれど打大人び給へるにいと若う美しげにて切に隠れ給へどおのづから漏り

見奉る」母御息所は影だに覚え給はぬをいとよう似給へり

と典侍の聞えけるを若き御心地にいと哀れと思ひ聞え給ひ

て常に参らまほしうなづさひ見奉らばやと覚え給ふ」上も

「藤壺御子

限りなき御思ひどちにてな疎み給ひそ」怪しくよそへ聞え

つべき心地なむする」無礼と思さでらうたらし給へ」面つき

まみなどはいとよう似たりし故通ひて見え給ふも似げなからずなむ」など聞えつけ給へれば幼心地にもはかなき花紅

葉につけても志を見え奉りこよなう心よせ聞え給へれば弘徽殿の女御又この宮とも御仲そばくしき故打添へてもと

よりの憎さも立出でて物しと思したり」世に類なしと見

奉り給ひ名高うおはする宮の容貌にも猶匂はしきは譬へむ

方なく美しげなるを世の人光君と聞ゆ」藤壺並び給ひて御

覚えもとりぐなれば輝くひの宮と聞ゆ」この君の御童姿

いと変へま憂く思せど十二にて御元服し給ふ」居起ち思し

営みて限りある事に事を添へさせ給ふ」一年春宮の御元服

南殿にてありし儀式のよそほしかりし御響きに落させ給は

ず」所々の饗など内蔵寮穀倉院など公事に仕う奉れる疎か

なる事もぞと取り分き仰せ事ありて清らを尽くして仕う奉

れり」坐す殿の東の廂東向に御椅子立てて冠者の御座引入

の大臣の御座の前にあり」申の時にぞ源氏参り給ふ」角髪

結ひ給へる面つき顔のにはひ様変へ給はむ事情しげなり」

大蔵卿藏人仕う奉る」いと清らなる御髪削ぐ程心苦しげな

るを上は御息所の見ましかばと思し出づるに堪へ難きを心

強く念じ返させ給ふ」冠し給ひて御休所に罷出給ひて御衣奉

り替へて下りて拝し奉り給ふさまに皆人涙落し給ふ」帝は

た況してえ忍びあへ給はず¹⁷⁹」思し紛るゝ折もありつるを昔

(前の悲し
意対 みに帰り) 180

の事取り返し悲しく思さる」いと斯うきびはなる程は上げ
劣りやと疑はしく思されつるをあきましよう美しげさ添ひ給

181

へり」引入の大臣の皇女腹に唯一人かしづき給ふ御女春宮
よりも御気色あるを思し煩ふ事ありけるはこの君に奉らむ

182

の御心なりけり」内裏にも御気色賜はらせ給ひければ「さ
らば此の折の御後見なかめるを添臥にもと催させ給ひけれ

183

ば然思したり」侍ひに罷出給ひて人々御酒など参る程親王

達の御座の末に源氏著き給へり」大臣気色ばみ聞え給ふ事

あれど物の慎ましき程にとまかくも得あへしらひ聞え給は

ず¹⁸⁵」御前より内侍宣旨承り伝へて大臣参り給ふべき召あれ

ば参り給ふ¹⁸⁶」御祿の物上の命婦取りて賜ふ¹⁸⁷」白き大桂に御

衣一領例の事なり」御杯の序に「いとよなき初元結に長き世

を契る心は結び籠めつや」御心ばへありて驚かさせ給ふ¹⁸⁹

「結びつる心も深きもとゆひに濃き紫の色も褪せずば」と

奏して長階より下りて舞踏し給ふ¹⁹⁰」左馬寮の御馬藏人所の

鷹すゑて賜はり給ふ¹⁹¹」御階の下に親王達上達部列ねて祿ど

も品々に賜はり給ふ¹⁹²」その日の御前の折櫃物籠物など右大

辨なむ承りて仕う奉らせける¹⁹³」屯食祿の韓櫃どもなど所狭

きまで春宮の御元服の折にも数増れり」なか／＼限りもな

く蔽しうなむ¹⁹⁵」その夜大臣の御里に源氏の君罷出させ給ふ¹⁷⁶」

作法世に珍らしきまでもてかしづき聞え給へり¹⁹⁷」いとよなき

はにておはしたるをゆくしう美しと思ひ聞え給へり¹⁹⁸」女君

は少し過し給へる程にいと若うおはすれば似げなく恥かし

と思いたり¹⁹⁹」この大臣の御覚えいとやんごとなきに母宮内

裏の一つ御腹になむおはしければ何方につけても物鮮かな
るにこの君さへ斯くおはし添ひぬれば春宮の御祖父にて終
に世の中を知り給ふべき右の大臣の御勢は物にもあらず

庄され給へり」御子ども数多腹々に物し給ふ」宮の御腹は

蔵人の少将にていと若うをかしきを右の大臣の御仲はいと善からねどえ見過し給はでかしづき給ふ四の君に婚せ給へ

202 (源氏と左大臣葵上)

り」劣らずもてかしづきたるはあらまほしき御聞どもにな

203 意対的名
む」源氏の君は上の常に召し纏はせば心安く里住みもえし

給はず」204 心の中には唯藤壺の御有様を類なしと思ひ聞えて

さやうならむ人をこそ見め」205 似る人なくもおはしけるかな」

大殿の君いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど心にも著かず覚え給ひて幼き程の御偏心に懸りていと苦しき

までぞおはしける」207 潜在的名(童時代は御簾中に入る)

簾の内にも入れ給はず」御遊びの折々琴笛の音に聞き通ひ

仄かなる御声を慰めにて内裏住のみ好ましく覚え給ふ」209

五六日侍ひ給ひて大殿に二三日など絶えなく罷出給へど只今は幼き御程に罪なく思しなしていとなみかしづき聞え

給ふ」210 御方々の人々世の中におしなべたらぬを択り調へ選

りて侍はせ給ふ」御心につくべき御遊びをしおふなく思

212 内裏には旧の淑景舎を御曹司にて母御息所の御方

々の人々罷出散らず侍はせ給ふ」213 里の殿は修理職内匠寮に

宣旨下りてになう改め造らせ給ふ」214 旧の木立山のたゝずま

ひ面白き所なるを池の心広くしなしてめでたく造りのゝし

215 潜在的名(葵上に不満)
る」かゝる所に思ふやうならむ人を居ゑて住まばやとのみ

216 潜在異対(実名)
歎かしう思し渡る」光君といふ名は高麗人のめで聞えてつ

け奉りけるとぞ言ひ伝へたるとなむ」217